Babad Tanah Jawi と Serat Kanda、そしてスマランの三保洞廟の資料を突き合わせることによって、Sunan Ngampel が Bong Swi Hoo であったという結論を導くことができる。彼がジャワに来たのは 1445 年が最初であった。Sunan Ngampel の妻の Ni Gede Manila は、Manila の元商館長で 1423 年に Tuban に移動させられた Gan Eng Cu の娘である。Gan Eng Cu は Suhita 女王から Arya Damar という名を賜った。ゆえに、Gan Eng Cu は Serat Kanda においての Arya Teja である。1430 年にマジャパヒト女王 Suhita は Gan Eng Wan という名の Gan EngCu の兄弟をマジャパヒト王国の太守(bupati)として取りたてた。<98>Gan Eng Wan は Tuban を管理するべく支配権を与えられた。彼は Wilatikta (マジャパヒト)の太守であった。この Raden Santri と Raden Brereh はこの Gan Eng Wan の娘と結婚したと思われる。Babad Tanah Jawi と Serat Kanda はこの記載情報が誤っている。Sunan Ngampel の舅は Wilatikta の太守 Gan Eng Wan ではなく、Arya Teja 別名 Gan Eng Cu である。Serat Kanda と Babad Tanah Jawi は、Sunan Ngampel には Bonang という名の息子がいて、この Bonang は後日 Sunan Bonang になったと伝えている。後日 Sunan Giri という名で知られることになるイスラム法学者 Maulana Wali Lanang と Blambangan の姫から生まれた息子の Giri と共に Bonang は Sunan Ngampel に育てられた。Sunan Bonang は、Tuban の華人総代である Gan Eng Cu 別名 Arya Teja の子供である Ni Gede Manila から生まれた Bong Swi Hoo の子孫であることは明白である。

第五項 Sunan Kalijaga と Sunan Gunung Jati

Sunan Kalijaga の名は Babad Tanah Jawi の中で良く知られている。彼は、たくさんの不可思議なことを見せてくれた「九人の聖人」(wali songo)の一人として見られている。Babad Tanh Jawi では Sunan Kalijaga は若い時には Raden Said と名付けられていたと述べている。彼は領主 Wilatika の息子であり Ni Gede Manila の兄弟であり、したがって Sunan Ngmpel の義兄であった。懺悔する前、彼はたくさんの悪事を働いた。Sunan Bonang に会ってから、彼は大変信心深くなったのみならず wali songo の一人になったのだった。たくさんある不可思議なこととは Demak のモスクの集成材の柱(saka tal)の創造である。サルタン Kalijaga の名は Demak のモスクの saka tal に関連している。この Saka tal に関する伝承は大変興味を引くものである。

上の説明から Sunan Ngampel 別名 Bong Swi Hoo は、Tuban の華人総代であった Gan Eng Cu の娘の Ni Gede Manila と結婚した。Sunan Ngampel は Raden Said (Sunan Kalijaga)の義兄弟であった。ここで、華人総代の Gan Geng Cu 別名 Arya Teja が Raden Said (Sunan Kalijaga)と特定することができる子供を持っていたかどうかに注目してみよう。<99>Gan Eng Cu は確かに Gan Si Cang という名の息子を持っていた。Jin Bun が 1478 年にマジャパヒトに対して反乱を起こした後、Kin San 別名 Raden Kusen はスマランでの最高権力者として Gan Si Cang を華人総代に取り上げた。この Gan Si Cang との共同作業で Kin San はスマランで製材所と打ち捨てられていた造船所を再建した。

1481 年には造船所の船大工たちの請願で Gan Si Cang は華人総代として Demak のモスクの完成を手伝うために Kin San に申請書を提出した。この申請は Demak の最高支配者の Jin Bun に回された。Jin Bun はこの申請を承諾した。Demak のモスクは、華人総代としての Gan Si Cang の指揮の下にスマランの造船所の船大工たちの手を借りて完成した。Demak のモスクの Saka tal は正確で整然とした木片を積み重ねた帆柱の構造に従って作られている。このようにして作られた Tatal の柱は一本の材木で作られた柱より海風や突風に対して強いのである。造船所の大工たちの労働力を動かしたスマランの華人総代の Gam Si Cang のためにこの柱が作られたと言っても真実から遠くはないのである。以上のように若い時には Raden Said という名であった Sunan Kalijaga は Gan Eng Cu 別名 Tuban の Arya Teja の息子でスマランの華人総代であった Gan Si Cang と特定できるの

である。

〈100〉Sunan Gunung Jati と Sunan Kalijaga と関係について次のように言うことができる。Serat Kanda には Sunan Cirebon が Wali Songo の一人として Demak のモスクを建てたという話が見受けられる。Talang の三保洞廟の資料ははっきりと Sunan Gunung Jati 別名 Syarif Hidayat Fatahillah について説明している。Talang の三保洞廟資料はこの廟に関係する重要な事件の年代記の形式をとっているため、この史料は信用できるものである。〈101〉1526 年に将軍を頭として Kin San が乗船した Demak の艦隊が Talang 港に投錨した。すでに分かっているように、Kin San はスマランの要人であった。艦隊の将軍(司令長官)と Kin San は Tang Eng Hoat が修行している Sarindil に向かうことに決定した。Sembung のイスラム法学者の Tan Eng Hoat と共に Demak 軍は住民たちから何ら反抗も受けずに Sembung に入った。事実、Demak 軍の将軍と Kin San は Trenggana のサルタンの使者として Tan Eng Hoat に称号を与えるためにやってきたのであった。与えられた称号は Mu La Na Fu Di Li Ha Na Fi (Maulana Ifdil Hanafi) であった。この Talang の三保洞廟からのデータはスマランの三保洞廟からのデータと合致することが証明された。この話はこう言っている。「中国語が得意な既に老いた Kin San は Sembung の華人ムスリムたちを服従させるために西に向かう Demak の艦隊に同行した」。年号も 1526 年である。

26 年後の 1552 年に、この Demak の将軍は単独で Sembung を再訪した。Tan Eng Hoat 別名 Maulana Ifdil Hanafi は不思議がった。この Demak 軍の将軍は Banten の王になっていたと聞いた。この将軍は Jin Bun の子孫たちの間の戦を見て絶望していた。Pajang サルタン国ではシーア派のイスラムが信じられていたので、彼は Pajang のサルタンに従うのを好まなかった。この Demak 軍の将軍は Sarindil で残りの人生を修行に捧げる意思を持っていた。Tan Eng Hoat はこの元 Demak 軍の将軍に、Sembung の華人ムスリム社会を指導して Demak の Jin Bun のようなサルタン国を建てることを依頼した。Demak でのように中国語とハナフィー派をやむを得ず手放したとしても Sembung の華人ムスリム社会の永続を保証するためには他の道がなかったからなのであった。元 Demak 軍将軍はこれに賛成したのであった。

1552 年に、この元 Demak 軍将軍は Sembung のムスリムたちの支持を得て Cirebon にサルタン国をたてた。1553 年に彼は Sembung のイスラム法学者 Tan Eng Hoat の

娘(華人女性)と結婚した。<102>サルタン国の建国後、この元 Demak 軍将軍自身が初代のサルタンになった。Tan Eng Hoat は Pangeran Adipati Wirasenjaya と称号し第二人者となった。初代の Cirebon のサルタンは 1570 年に死去し、この華人女性との間に生まれた息子と交代した。第二代目のサルタンはまだ若かったので、彼は Tan Sam Cai 別名 Tumenggung Arya Dipawiracula という名の母方のいとこに育てられた。

初代の Cirebon のサルタンは Sunan Gunung Jati であった。上記のようにこの Sunan Gunung Jati は Pangeran Trenggana の時代の Demak 軍の将軍と同一人物である。Demak が Sunda を打ち破った直後に Demak 軍の将軍は昇進して Banten の太守になった。Cirebon サルタン国は Sunan Gunung Jati によって 1552 年に初めて建国された。このように、スマランの華人総代である Sunan Kalijaga 別名 Gan Si Cang は、Babad Tanah Jawi や Serat kanda に述べられているように Cirebon で知り合ったのでは絶対にないのである。Gan Si Cang と Sunan Gunung Jati はスマランで知り合ったのである。その時 Sunan Gunung Jati は Demak 軍の将軍として、Gan Si Cang はスマランの華人総代として働いていたのである。実際にこのことは重要ではない。重要なのは、西に向かう途中で Sembung に停泊し、その後 1552 年に Sembung を再訪し、この Syarif Hidayat Fatahillah 別名 Sunan Gunung Jati とともに Cirebon サルタン国を建国したのは実際には誰であったかを解釈することなのである。

Demak の艦隊が Sembung を訪れた年と、それに関する後日の Demak 軍の二回目のマジャパヒト攻撃の年をよく見ると、説明ができると思われる。その年は 1526 年である。この年号は 1521 年に王位についた Trenggana のサルタンの治世の時代から離れている。Trenggana サルタンは 1546 年まで統治していた。1527 年に Trenggana サルタンは Toh A Bo という名の自分の息子の指揮下で軍隊をマジャパヒトに送った。<103>Demak 軍はマジャパヒトの王宮を占拠した。Demak 軍が Sembung に凱旋した後、この一年間に軍の司令官に変わりはなかったと解釈できる。ゆえに、この Sembung を訪問したのは 1527 年にマジャパヒトに向けて出陣した Demak 軍の将軍であった Toh A Bo と同一人物である。それゆえ、Syarif Hidayat Fatahillah 別名 Sunan Gunung Jati とは Toh A Bo であり、Trenggana のサルタン Tung Ka Lo の息子ということになる。

第六項　Sunan Bonang とSunan Giri

Sunan Bonang とSunan Giri の名は Babad Tanah Jawi とSerat Kanda の中で良く知られている。よく知られているのは Sunan Bonang とSunan Giri は Sunan Ngampel に一緒に育てられたという話である。Sunan Bonang は Sunan Ngampel の実子であり、一方 Sunan Giri は、Blambangan の女性と Babad Tanah Jawi によると Wali Lanang、また Serat Kanda によると Sayid Iskak の間に生まれた息子であり、Sunan Ngampel の愛弟子であった。メッカへの巡礼の途中のマラッカまで行って Wali Lanang にであった。彼らはジャワにもどった。

スマランの三保洞廟の年代記は 1479 年に Bong Swi Hoo の息子の一人と塾生がスマランの造船所と三保洞廟を見学に来たと記録している。彼らは中国語が上手でなかった。

彼らは Sunan Bonang とSunan Giri であった。彼らはジャワのイスラム社会で育てられたために中国語は話せなくても二人とも混血華人であった。スマランへの訪問は Babad Tanah Jawi とSerat Kanda に記録されているようにマラッカへの往路であったか帰路であったのだろう。1451 年以来、Bong Swi Hoo 別名 Raden Rahmat あるいは Sunan Ngampel は Bangil の華人イスラム社会を去り、右ブランタス河（Kali Mas)の河口に転居した。そので彼はジャワ人のイスラム社会を構築した Bong Swi Hoo にい率いられた Kali Mas 河口のジャワ人のイスラム社会の地域は Ngampel と名付けられた。左ブランタス河口の Bangil から Bong Swi Hoo が去った後、華人ムスリム社会は後退を余儀なくされた。最終的には華人ハナフィー派のモスクは三保洞廟になってしまった。それとは反対に、Ngampel のジャワ人イスラム社会は小さく始まったが、大きく発展した。Bong Swi Hoo と Gan Eng Cu の娘の Ni Gede Manila (Babad Tanah Jawi による)との結婚が 1447 年に行われたので、その当時 Bonang は約四歳であった。したがって、Bonang は華人ではなくジャワ人のイスラム社会で大きくなったのである。このようなことは我々が現在体験しているように普通のことなのである。インドネシアの華人たちはジャワやスンダその他の社会の中で大きくなったが故に、中国語が不得意なインドネシアの華人たちが多い。

Bonang がメッカとマラッカに向けて出発しスマランに投宿した時、かれは約 30 歳で

あった。Sunan Giri は Sunan Bonang と同年齢であった。Babad Tanah Jawi によると Sunan Giri は Wali Lanang の子孫であり、Serat Kanda によると Jullah 出身の Maulana Iskak と Blambangan の女性との間の子供である。Giri も Bonang と同じ環境で大きくなった。それ故、彼も中国語が得意ではなかった。こういうことでなぜ Bonang も Giri も中国語が得意ではなかったということが理解できるのである。Wali Lanang あるいは Maulana Iskak は Pasai 出身の Malik Ibrahim に他ならない。Giri は Malik Ibrahim あるいは Maulana Mahribi[16]と共にジャワに向けて出発した。ジャワへの旅行中彼らは Ngampel に投宿した。Sayid Iskak は Raden Rahmat 別名 Bong Swi Hoo の叔父であった。彼もチャンパ出身の Bong tak Keng の子孫であったのである。〈105〉

第七項　チャンパ姫（Putri Campa）

Babad Tanah Jawi と Serat Kanda によると、マジャパヒト王と結婚したチャンパ姫の名は Dwarawati でチャンパ王の子孫で Raden Rahmat の母親であるとのこと。このチャンパ姫は華人の姫との多妻婚を喜ばなかった。マジャパヒト王にはチャンパ姫以外に巨人女の化身である Ni Endang Sasmitapura という妻がいた。Ni Endang Sasmitapura は Arya Damar/Jaka Dilah を生んだ。ここで浮かんでくる問題とはこの Serat Kandad と Babad Tanah Jawi でチャンパ姫と書かれているのはいったい誰であろうかということである。

Jaka Dilah / Arya Damar は Swan Liong であることは既に証明されている。Palembang の華人総代はマジャパヒト王 Hyang Wisesa の息子である。マジャパヒト王 Hyang Wisesa とは 1389 年から 1427 年まで治世を敷いた Wikramawardhana 王のことである。Wikramawardhana の妃は Hayam Wuruk の娘の Kusumawardhani であった。この妃から中国語の資料では Su King Ta と呼ばれている後日女王となる Suhita 姫が生まれた。Ni Endang は Arya Damar / Swan Liong を生んだ。パララトンは、Wikramawardhana 王あるいは Hyang Wisesa は妾腹から Bhre Tumapel と Sri Kertawijaya という名の二人の息子を得たと述べている。Bhre Tumapel と Sri Kertawijaya の母親が誰であったかはわからない。チャンパ姫について Serat Kanda

[16] Tuank Rao の p116 で Malik Iskak と Malik Ibrahim は Gresik (TseTsun)に住んだとある。Malik Ibrahim は 1419 年に死去した。Giri は Gresik の丘の名前である。

では、チャンパ姫は妊娠したとあるが、子供が誰であったかははっきりと述べていない。Wandan の女性から、Babad Tanah Jawi と Serat Kanda によると、王は Tarub で Bondang Kejawan 別名 Lembu Peteng を作ったとある。

はっきりしているのは、チャンパとマジャパヒトの間に交流関係があったということである。このチャンパ姫が本当に Wikramawardhana の妻であったかどうかはまだよく調べなくてはならない問題である。このチャンパ姫は本当にチャンパ王の娘であったかあるいはチャンパの有力者の娘であったのかは調査しなくてはならない。Wikrawardahana 王の治世下の 1424 年に雲南から Ma Hong Fu という名の有力者がやってきたのは確かである。<106>Ma Hong Fu の妻はチャンパ人で Bong Tak Keng の娘であった。Bong Tak Keng はチャンパの華人総代であり東南アジアの全華人社会を統率していた。このように Bong Tak Keng は大変支配力が強かったのである。彼は 1419 年にチャンパに派遣された。その時、マジャパヒトを統治していたのは Wikrawardhana 王であった。雲南の大使 Ma Hong Fu の妻も特に祝祭日にはマジャパヒトの国民の前にしばしば顔を出していたと言える。有力者の妻として、彼女は他の有力者たちの貴賓席に座ることができて、王の側室とマジャパヒトの有力者の妻たちと交流していた。マジャパヒトの都でのチャンパ姫の存在は国民に知られることとなった。マジャパヒト時代には有力者の妻たち(女性)の席は有力者たち(男性)の席とは区別されていた。国民自身は誰が本当のチャンパ姫であるかははっきりとは知らなかった。このような件では、有力者の妻たちや側室たちの間に座っているチャンパ姫を Wikrawardhana 王の側室と人は簡単に思いこんでしまったのだろう。このことは口から口へと伝えられた。このことから、王はチャンパ姫を側室にしたという俗説が形成された。大使 Ma Hong Fu の妻のチャンパ姫は亡くなってイスラム式でマジャパヒトに葬られた。[17]この出来事はチャンパ姫が王の側室であったという国民の疑惑をさらに強めたのであった。Ma Hong Fu 大使は 1449 年にマジャパヒトを離れスマラン経由、一人で中国に向かった。この出発は Wikrawardahana 王の末子の Sri Kertawijaya の治世からは遠いのである。上記のように、チャンパ姫が意味しているのはチャンパの華人総代である Bong Tak Keng の娘で Ma Hong Fu 大使の妻であると思われるのである。

[17] Serat Kanda によると Dwarawati 姫はサカ歴 1320 年(この年号は明らかに間違い)に死去し Citrawulan にイスラム式で埋葬された。Trowulan のチャンパ姫墓廟ではサカ歴 1370 年(西暦 1448 年)の記載がみられる。この年号はスマランの三保洞廟の資料と合致する。一年後の 1449 年に Ma Hong Fu 大使はマジャパヒトを後にする。(パララトン p197 参照)

〈107〉

第八項　Kertabhumi と Girindrawardhana

マジャパヒトの最後の王は Kertabhumi 王である。彼は 1474 年から 1478 年まで統治した。この話はパラランントンに見られる以外に、すでに上で解説したようにスマランの三保洞廟の中国語資料にもみられる。Raden Patah 別名 Pangeran Jin Bun の攻撃で Sengguruh に逃げ込みその後バリに避難したという、最後のマジャパヒト王は防衛できなかったと述べている Serat Kanda にある話に関してである。Kertabhumi 王は捕虜になり Demak に連行された。Demak で彼は Jin Bun すなわち Raden Patah の実父であるが故に厚遇されたのであった。マジャパヒトの都は破壊を逃れた。

Kertabhumi 王が Demak に連行された後、マジャパヒトは 1486 年まで華人の支配人 Noo Lay Wa に、その後 Girindrawardhana 王に支配された。Girindrawardhana 王の名はサカ歴 1408 年、西暦 1486 年、Demak イスラム軍によるマジャパヒトの滅亡の八年後に発布された Sri Brahmaraja が Trailokya の土地を下賜したことに関連する Jiyu 碑文に見られる。彼の本名は Dyah Ranawijaya であることは既知である。彼は çri mahãrãja, çri Wilawatikta Daha Janggala Kadidi prabu nãtha と自称しているゆえに、彼はマジャパヒト、Daha, Janggala, Kediri を治めていたことになる。資料によると、中国が Pa Bu Ta La に命令されていたとのこと。彼は Kertabhumi の婿で Demak の属国王になり、貢物をしなければならなかった。その年とは 1488 年であった。中国語年代記の Pa Bu Ta La とは Jiyu 碑文の Sri Girindrawardhana と同一人物である。Ta La は Girindrawardhana の名の一部の dra の訳である。Sri Girindrawardhana Dyah Indrawarman Jaya というのが正しい名である。Demak の属国の王として Girindrawardhana は Jin Bun 別名 Raden Patah の要求に服従せざるを得なかったのであった。

Girindrawardhana の発案により中国語で Moa Lok Sa と呼ばれていたマラッカとマジャパヒトの間の交流が行われた。その当時マラッカはポルトガル人たちに支配されていた。〈108〉このようにマジャパヒトにやってきたのはポルトガル人であった。このポルトガル人たちは中国年代記で南蛮人といわれている。この商業関係は Demak に損

害を与えた。それ故、Jin Bun はこのマジャパヒトとマラッカの関係を快く見ていなかった。1517 年に Jin Bun はマジャパヒトに軍を送った。マジャパヒトの王宮は攻撃された。宮殿の財宝は Demak の軍の略奪に遭った。Jin Bun は怒りのゆえに黙止していただけであった。Girindrawardhana の妃が Kertabhumi 王の娘で Jin Bun の実の妹であったということだけで、Girindrawardhana の間違いは許されたのであった。彼はそのままマジャパヒトの太守すなわち属国王であった。一年後の 1518 年に Jin Bun が死去した。Jin Bun の地位はその長男である Yat Sun 別名 Sultan Yunus に引き継がれた。しかしながら Yat Sun はたった三年間治世を敷いたのちに死去した。Demak での後継者争いが起きた。その当時もマジャパヒト王 Girindrawardhana はマラッカと中国との通商関係を続けていた。Girindrawardhana は外国からの援護を求めていたのであった。既にポルトガル人の手中にあったマラッカと Girindrawardhana は交流を行い、一方ポルトガル人は Demak との間で緊張関係にあった。1521 年に Yunus サルタン別名 Yat Sun は Moa Lok Sa を攻撃した。1521 年に Yat sun 別名 Sultan Yunus の兄弟である Tung Ka Lo 別名 Raden Trenggana という人が王位につき Demak のサルタンになった。その六年後に Tung Ka Lo は Toh A Bo という名の息子に Demak 軍を率いらせ、マラッカのポルトガル人たちと商業関係があったマジャパヒトに送った。Tung Ka Lo はその父親の Jin Bun 別名 Raden Patah より厳しい態度をとった。Tung Ka Lo に率いられた Demak 軍はマジャパヒトを攻撃した。Girindrawardhana が犠牲となった。王子たちは逃亡し東方面に避難し、Pasuruan や Panarukan[18]を目指した。マジャパヒト王国は歴史から消え去ったのであった。〈109〉

Demak 軍司令官の Toh A Bo は Tung Ka Lo 別名 Raden Trenggana の息子で Cirebon の Sunan Gunung Jati であったことは既に示したとおりである。1527 年のこの Demak 軍のマジャパヒト攻撃は年代記録では 1478 年に Jin Bun 別名 Raden Patah の指揮下で行われたとある。それ故 Demak 軍がマジャパヒトを二回攻撃したという話が出来上がってしまった。王は Raden Patah への屈服を望まなかったしイスラムへの改宗も望まなかったために Sengguruh に避難しその後バリ島に逃げ込んだ。マジャパヒトは 49 年間にわたり Demak イスラムサルタン国の属国であった。

18 (訳) 現在の Situbondo

第九項　Raden Trenggana

Babad Tanah Jawi によると、Demak のサルタン Pangeran Jin Bun には、Pangeran Cirebon と結婚した Ratu Mas、次にサルタンの地位を継いだ Pangeran Sabrang Lor[19]、Pangeran Seda Lepen、Raden Trenggana、Raden Kanduruwan、Raden Pamekas の六人の子供がいた。Pangeran Sabrang Lor 別名 Sultan Yunus は子孫を作らずに死んだ。その後任は Raden Trenggana であった。

同じような話は Serat Kanda に見られる。Serat Kanda によると、Sultan Demak 別名 Bintara 太守は以下のように子供を残している。第一夫人から Raden Surya と Raden Trenggana で、Randu Sangah 出身の第二夫人からは Raden Kanduruwan である。彼は Raden Trengganan より年上であり、第三夫人からは Raden Kikin と Ratu Mas Jawa がいた。第三夫人は Jipang の太守の娘であった。

スマランの三保洞廟の年代記はただ Jin Bun には Yat San と Tung Ka Lo という二人の男の子がいたとしか記録していない。Yat Sun は Jin Bun の後任となり 1518 年から 1521 年まで統治した。1509 年に Yat Sun ははスマランの造船所見学旅行に Kin San を伴った。彼はマラッカ攻撃の準備を意図していたからDemak の艦隊を拡張していた。マラッカ攻撃は 1512 年に行われたが失敗した。1521 年に Kin San の作ったより大きな艦隊で再度攻撃が繰り返された。<110>Yat Sun は戦死し、Tung Ka Lo が後任となった。Yat Sun の死後サルタンの後任をだれにするかで騒動が起きた。このことは Demak のサルタンの地位を望む他の人たち、Jin Bun の子孫たちがいたということを意味している。しかしながら中国語の年代記はその名前を述べていない。たぶん Jin Bun の他の子供たちは重要でないと判断されたからであろう。

この比較から、Raden Surya (Serat Kanda)が Pangeran Sabrang Ler または Sultan Yunus (Babad Tanah Jawi)で中国年代記では Yat Sun であり、Raden Trenggana(Serat Kanda と Babad Tanah Jawi)が中国年代記での Tung Ka Lo であるという結論を導くことができる。

Babad Tanah Jawi で、Pangeran Seda Lepen が Trenggana の長男の Sunan Prawata

---

19 (訳) 原文の Pangeran Sabrang Ler は文脈から見るとイプミス。

に殺されたと言っている。[20]Pangeran Seda Lepen は Arya Panangsang Jipang の父である。すなわち、Pangeran Seda Lepen は Jipang 太守の婿である。Serat Kanda によると、Jipang の太守の娘と結婚した Pangeran Jin Bun の息子は Raden Kikin である。これ自体で、Raden Kikin が Pangeran Seda Lepen と同一人物であることがわかる。Raden Trenggana 別名 Tung Ka Lo にとって、Pangeran Seda Lepen 別名 Raden Kikin が太守 Yunus 別名 Yat Sun の死後 Demak のサルタンの地位を相続するための障害になっており、その原因というのは Raden Kikin が Raden Trenggana より年上であったということであった。Raden Kikin は第三夫人から生まれ、一方 Raden Trenggana は正妻から生まれたのではあったが。[21]これが Sunan Prawata が Raden Kikin 別名 Pangeran Seda Lepen を消した原因であった。スマランの中華廟の記録の意味は、この事件が王権の奪い合いだったことであった。〈111〉

Arya Penangsang Jipang は恨みを Sunan Prawata に向けた。Raden Kikin の暗殺から 25 年後、Sunan Prawata は Arya Penangsang Jipang という名の息子から復讐を受けた。Jin Bun の子孫の間での 1546 年の骨肉相食む戦いは Demak サルタン国の衰亡に影響した。Muk Ming は Jipang に斃された。しかし、Arya Penangsang Jipang は Pengging の Jaka Tingkir との戦いで戦死したため、かれは Demak を支配することができなかった。Jaka Tingkir は Sultan Trenggana の婿でありマジャパヒト王の子孫である Pengging の Dyaningrat 太守の孫でもあった。

Sultan Trenggana の治世下で Demak は Maluku 諸島での香料貿易を支配しその支配地域を拡大した。最初の敵はポルトガル人であった。ポルトガル人と関係がある誰でもが Demak 軍に襲われた。1522 年に王がマラッカからのポルトガル人と友好条約を締結し、かつまた Sunda Kelapa にポルトガル人が砦を建設することを許可したため、1526 年に Demak 軍がスンダに派遣されたのであった。Demak 軍とスンダ軍との戦いの中でスンダ王の Baduga が戦死した。Fransisco da Sa 司令官に率いられたマラッカからのポルトガル軍は敗北を喫した。Sunda Kelapa に砦を作ろうという意図はくじかれたのであった。1517 年と 1521 年にポルトガル人たちとの関係構築を試行したマ

[20] Babad Tanah Jawi p75

[21] Serat Kanda では Raden Kanduruwan は Raden Trenggana より年上であったと言っている。これを意図しているのは Raden Kikin ではないかと思われる。習慣によると、年長の子供が王権の相続により大きな権利を有しているのである。それゆえに Sunan Prawat 別名 Muk Ming にとって父親の Raden Trenggana の必要性から Raden Kikin を消すための理由があったのである。

ジャパヒトの Girindrawardhana 太守は常時警戒対象となった。1527 年にスンダから凱旋した Demak 軍はその後マジャパヒトに派遣された。マジャパヒトの都は Demak 軍に占領されてしまったのだった。

Babad Tanah Jawi から Sultan Trenggana(Tung Ka Lo)は四人の娘と二人の息子がいたということがわかる。長男は Sunan Prawata という名で末の息子は Pangeran Timur という名であった。このことはスマランの廟の資料と合致している〈112〉。

中国年代記では Raden Trenggana(Tung Ka Lo)には Muk Ming と Toh A Bo という二人の息子がいたと書かれている。Muk Ming はスマランで Kin San に教育を受けた。Tung Ka Lo は東の海へ遠征し香料諸島を奪うために、スマランの華人ムスリム社会の援助を受け、Muk Ming は一隻に 400 人が乗れる大型のジャンク船 1000 隻を完成させた。昼夜兼行でスマランの造船所で人々は働いた。東の海への遠征は 1546 年に行われた。

Kin San が 1529 年に死亡した後、Muk Ming がスマランでの最高権力を持つ支配者として交替した。Toh A Bo は軍事教育を受け 1526 年 Cirebon とスンダへの派遣の指揮をとり、1527 年にはマジャパヒト攻略の Demak 軍を指揮した。上に述べたように、Toh A Bo とは Banten と Cirebon のサルタンになったことがある Syarif Hidayat Fatahillah (Faletehan)別名 Sunan Gunung Jati であった。

1546 年に Sultan Trenggana 別名 Tung Ko Lo が死去した。Muk Ming が Demak サルタン国の王位を継承した。Arya Penangsang Jipang という名の Jin Bun の孫が父親の暗殺の復讐とサルタンの地位を奪おうとしていた。Arya Penamgsang Jipang は Demak を攻撃するために自分の軍を派遣した。Demak の町と宮殿がすべて灰と化した。焼け残ったのは大モスクだけであった。Muk Ming 別名 Sunan Prawata はスマランに退却し、Jipang 軍がそのまま進軍してきたが造船所に立てこもった。スマランの町と造船所すべてが灰と化した。焼け残ったのは廟とモスクだけであった。Muk Ming は戦死した。Ja Tik Su (=Jafat Sadik は Sunan Kudus の称号)により、直ちにサルタンの後継者となるはずの Muk Ming の息子も殺されてしまった。Jipang 軍は Demak サルタン国を滅ぼすことに成功し、焦土作戦を行った Demak で完全に支配権を得たのであった。Jin Bun によって 1475 年に建国された Demak サルタン国はたった 71 年間の命

脈を保っただけで 1546 年に終焉を迎え、実際には二世代のみであった。〈113〉

同年に、Jipang 軍は Jaka Tingkir が率いる Pengging 軍の攻撃を受けた。Arya Jipang は Pengging 軍の攻撃の中で戦死した。Jaka Tingkir は後日、現在の Surakarta 市の西側の内陸部に Pajang サルタン国を建設した。Pajang の名はナガラクレタガマとパララトンでも多数述べられている。Pajang 地方はマジャパヒトの属国であった。Babad Tanah Jawi と Serat Kanda によると、Jaka Tingkir 別名 Mas Karebet はマジャパヒト王の孫にあたる Pengging 太守 Jayaningrat の子孫である。マジャパヒト王の子孫が Jin Bin の子孫に対して恨みを晴らす機会をずっと窺っていたと言えるだろう。

1456 年に起きて、その後 Pengging 軍が Jipang 軍を攻撃したことがつづいた Jin Bun の子孫たちと Arya Jipang と Muk Ming 間の内戦は、Talang の三保洞廟の年代記によると、Toh A Bo が Demak を後にして Sarindil で修行した後、Tang Eng Joat の提案で Cirebon サルタン国を建設した一つの原因になった。

Jin Bun の子孫は Pengging の攻撃をはね返すことはできなかった。Demak 軍の元司令官で元 Banten のサルタンの Toh A Bo は Pengging 軍の脅威から身を守るために Demak を後にして Cirebon に避難したのであった。

第十項 Adipati (太守) Yunus

Tomé Pires は著書 Suma Oritenal の中で、Pate Unus の経歴と経験について語っている。Pate Unus の先祖は南西カリマンタンの出身であると語っている。彼はマラッカに出稼ぎに来てマレー人女性と結婚した。この結婚から Pate Unus の父親が生まれた。Pate Unus の父親はその後ジャワに戻った。Japara の太守を暗殺した後、かれは Todung 村周辺を支配した。彼は Jepara の支配者になったのである。Pate Unus の父は Demak の pate Robin と良い関係にあった。Unus という名の息子は Demak の Rodin の娘と結婚したのであった。

1512 年の初め、Unus はマラッカを攻撃したが失敗に終わった。スマランと Rambang から献上されたいくつかのジャンク船が戦闘で灰燼に帰した。マラッカ攻撃に出た 100 隻のジャンクで戻ってきたのは 7 あるいは 8 隻だけであった。全ジャワと